

シュライナー・ゼーネン著

ブラフマ・プラーナの梵語索引と原典

原 實

既述の Ludo Rocher の著の154頁に Brahma-purāṇa の原典の出版が述べられているが, Ānandāśrama Sanskrit Series (28, 1895) と Veṅkateśvara Press (Bombay 1906) の二刊本 (cf. Rocher, *op. cit.*, p.60) を対照しつつ, 両書の註に言及される幾つかの異読を参照して新たに批判的にこの purāṇa のローマ字本を出版したものに, ここに述べる P. Schreiner と R.Söhnen の手に成る大冊がある。

この企画は既に1982年, Tübingen System of Text Processing Programs (TUSTEF) の一環として H.von Stietenron により Tübingen Purāṇa Project の名の下に進められ, 著者の一人 P.Schreiner は1983年, 既述の Purāṇa 誌 (XXV. No.1) にこの Project の大綱を発表している。この企画は所謂近代的な Computer や Word-processor の技術を Purāṇa の Text に応用した最初の試みとして注目され, Text (adhyaīya 1-246) の出版もされることながら, 巻末に添付されている三種の Microfishe (Key-Word-In-Context (KWIC) Index, Index of Word Forms, Reverse Index) はこの文献の研究のために画期的な成果と称し得る。これらを作製する上での基本的原理, 従って本書の読者がこれら microfishe を如何に利用すべきか, その利用法は序論 xv 以下に詳述されている。その意味で本書の出版は今後益々各地で盛になるであろうと予想される近代的技術の Sanskrit Text への応用に一つの試案を提供したものと称し得る。

ここに人有って或いは次のように言うかも知れない。All India Kashiraj Trust より順次に purāṇa 原典の批判的出版が刊行されつつある現在, この種の出版にどれ程の意味があるかと。即ち将来インドで Brahma-purāṇa の批判的出版が刊行された暁に, この Tübingen Purāṇa Project の出版は一写本に墮してその存在理由を失うことにならぬか。しかしこの危惧は上の Rocher の書を繙くことによって解消する。何故なら purāṇa 文献は西洋流にいう厳密な文献学的方法, 原典批判の適用対象にならぬ故である。Purāṇa の Critical Edition の出版が果して可能であろうか。又学者の中にはそれを絶望視する向きのあることを考慮すれば, この種の危

俱は元来抱くに値いせぬ性質のものである。著者兩人はこの種の文献の性格を熟知し、自らの限界を知り、己が業績に対して極めて謙虚である。従って、この企画を時代錯誤として批議することは当を得ない。

筆者は著者兩人の努力を多とし、巻末にみえる *Brahma-purāṇa* を中心とする14の *Concordance* (Appendix 1-14) を評価すると共に、近い将来に彼らが残余の二計画、即ち a detailed English summary of contents of the *Brahma Purāṇa* with complete index to the summary 並びに an annotated bibliography on Purāṇic and Epic texts and studies を遂行し、更には P.Schreiner 本来の関心事である *Viṣṇu Purāṇa* に同類の研究方法の適用される日の近からんことを期して待つ者である。

Peter Schreiner and Renate Söhnen: *Sanskrit Indices and Text of the Brahmapurāṇa*. Purāṇa Research Publications. Tübingen. edited by Heinrich von Stietencron, Volume 1 (1987 Otto Harrassowitz, Wiesbaden) I-XXIII + pp.1-826.